

Vision or Nightmare

浅田 雅明

『ハウーズ・エンド』(*Howards End*)を出版したあと14年間の沈黙を破って、フォスター(E. M. Forster)は『インドへの道』(*A Passage to India*)を1924年に発表した¹。この作品は1924年末までにイギリスで17,000部、アメリカでは54,000部を超えるベストセラーとなったのだが²、植民地のインドの統治をめぐるイギリス人とインド人との軋轢という政治的な問題を扱ったフォスターの最高傑作である。フォスターとインドとの係わりは、1906年にインドの名家の青年のオックスフォード入学準備の為にラテン語の個人指導をしたことを除けば、前作との間に二度のインド旅行がある。最初は1912年に、その後1921年にインドを再訪し、約半年間デワス・シニア藩王国の顧問格として滞在している。こうしたインド旅行、『モリス』(*Maurice*)—フォスターの没後1971年に出版—の執筆、さらに第一次大戦中には赤十字の要員としてアレクサンドリアに滞在し、帝国主義に対する関心を深めるという経験を経たのちに出版された『インドへの道』には、多くの批評家が触れてきた。この作品が政治的、社会的小説として捉えられ、在印のイギリス人の描き方が議論されたのは当時の社会情勢を考慮すると当然のことであるが³、出版後の批評ではロジャー・フライのような例外はあったものの⁴、これまでのフォスターの小説よりも視野が深く想像力が豊かな最高傑作であるという点では異論がなかった⁵。その後哲学的、宗教的側面からの研究、洞窟の反響、ヒンズーの祭典などが次々に議論の中心となっていくことでわかるように、この小説は多様な要素を含む作品である。しかし結末に目を向けると、フォスターの小説のなかでこの作品だけが表面的には否定的な結末で、別離を強調している。フォスターは「開かれた結末」で小説を終え、問題を提起するだけで明確な結論を提示しないという、煮え切らない懐疑的な立場を採るのが常

であるけれど、この作品の結末で真に表明しなかったのは肯定的な心情なのか、あるいは否定的な心情なのであろうか。拙論では、「何か重要なこと」が起きる場所として存在するマラバー洞窟が登場人物に及ぼす影響を主軸として、フォスターが初期の作品から追及してきたテーマである人間関係について考察し、長編小説としては最後の執筆となったこの作品において作者が提言するメッセージを探ろうとするものである。

『インドへの道』においては、イギリスとインドの対立を背景にして人間関係や異文化間の衝突を描こうとしたが、政治的、社会的、宗教的な要素が今までのフォスターの作品に比べて強調されており、こうした観点から論じられることが多かった。しかしピーター・バラ (Peter Barra) も指摘するように、フィールディング (Fielding) とアジズ (Aziz) との人間関係、友情がこの小説の真の主題であり⁶、物語りはアジズとムア夫人 (Mrs. Moore) の寺院での出会いで動き始め、フィールディングとアジズの別れで幕を閉じる。作品の第2章はアジズと仲間たちによる議論—友情の本質と、イギリス人とインド人は友人になり、その関係の維持は可能か—という議論で始まり、その後、アジズは寺院でムア夫人と出会う。スタリブラス (Oliver Stallybrass) によれば、この第2章が執筆当初には最初の章であり、第7章まで書き進んだあと新たに現在の第1章が書き加えられたということだが⁷、この作品においても友情、人間関係がフォスターの最大関心事であったことがわかる。『インドへの道』は「回教寺院」(MOSQUE)「洞窟」(CAVES)「神殿」(TEMPLE)の三部から構成されており、それぞれがインドの季節をあらわしていると考えられ⁸、この三部構成の解釈についても様々なアプローチがされてきたが⁹、フィールディングとアジズとの関係を軸に展開していると考えればフォスターの意図を理解することが容易になる。第一部ではフィールディングとアジズの友情が結ばれ、第二部でふたりの友情はマラバー洞窟の試練を受け、結ばれたかに思えた友情に亀裂が生じ、第三部で再会した二人は一時友情を取り戻すものの結局は別れ、作品の冒頭で提示された、イギリス人とインド人は友人になることができるかというテーマに一応の結論が下される。このように考えると、フォスターが社会的、宗教的な要素を絡めながら『インドへの

道』で意図したことは、これまでの作品と同様に人間関係を描くことであったことは明らかであるけれど、フォスターが目指す良好な人間関係はいかなる状況でどのようにして構築できるのでしょうか。アジズとフィールディング、ムア夫人との人間関係を具体的に検証することにより考察してみよう。

アジズは妻を亡くしたあと三人の子供を妻の実家に預けて一人暮らしをしている、イギリス人が院長を務める病院の優秀なインド人医師である。イギリス人に支配されるインド人でありながら、更にそのインド社会のなかでは少数派のイスラム教徒のインテリでもある。イスラム教とヒンズー教という宗教面の対立だけでなく、伝統的な階級制度によってもインド社会は複雑に分断されているが、アジズはインド社会において複雑で微妙な立場にいて、インド社会というひとつの組織を代表する人物とは言えない。

チャンドラポア (Chandrapore) の町のカレッジの校長フィールディングは40歳を過ぎて初めてインドにやってきた中年のイギリス人で、人生経験はかなり豊かである。インドの文化に敬意と関心を示し、同じ人間として、インド人に対してもイギリス人に対するのと同じように個人的な人間関係を持つようとする人物で、人間関係に関しては楽観的な考え方をしている。在印のイギリス人の中では例外的に誠実かつ公正な人間であり、自らの西欧的教養にやや疑いの念を持っており、良心を貫こうとする生き方はイギリス人たちからは異端視され、孤立している。フィールディングもまた在印のイギリス人社会を代表する人物ではない。

イギリス人のムア夫人は、チャンドラポアで判事をしている息子ロニー (Ronny) に合わせるため、イギリス人女性アデラ (Adela Quested) を伴ってインドに着いたばかりの既に60歳を超えた女性で、キリスト教を基盤とする西欧文化に疑念を抱いている。ロニーが支配者階級的な考え方をし、威厳だけは備えたもったいぶった青年判事になっているのを見て失望し、在印のイギリス人社会よりもインド文化に興味を引かれ、次第にヒンズー教的世界観からものを見るようになる。

アジズとムア夫人の出会いの場面を見てみよう。アジズは病院長のカレンダー少佐 (Major Callendar) から緊急の呼び出しを受け、駆けつけるのだが、

苦勞して屋敷にたどり着くと呼び出した少佐は不在で、伝言ひとつ残していなかった。おまけに乗ってきた馬車 (tonga) までイギリス人女性のカレンダー夫人 (Mesdames Callendar) とレズリー夫人 (Mrs. Lesley) に横取りされ、在印のイギリス人に対する憤懣を鎮めようと回教寺院の境内にはいり、月明かりのなかでムア夫人に出会う。

He was excited partly by his wrongs, but much more by the knowledge that someone sympathized with them... She had proved her sympathy by criticizing her fellow-countrywoman to him, but even earlier he had known... "You understand me, you know what others feel. Oh, if others resembled you!"

Rather surprised, she replied: "I don't think I understand people very well. I only know whether I like or dislike them."

"Then you are an Oriental."¹⁰ (下線部筆者)

アジズはイギリス人に対して劣等感と不信感を抱いているのだが、異文化の宗教にも偏見を持たず、尊重して作法を守ろうとするムア夫人の姿勢に感激してしまう。ムア夫人は人と人を隔てる障害物を乗り越えることが出来る能力を持った人物であるが、『それではあなたは東洋人だ』とアジズはムア夫人に信頼を寄せ、彼女の親切さと純真さに心を慰められる。ムア夫人を在印のイギリス人社会に属する人間としてではなく、ひとり人間として捉え、友人として人間関係を結ぼうとするのである。

アジズとフィールディングの関係も同様である。アジズの裁判後にイギリスに帰国する以前は、フィールディングは在印のイギリス人の間では破壊分子だと思われ、イギリス人社会からはみ出している人物である。

The feeling grew that Mr. Fielding was a disruptive force, and rightly, for ideas are fatal to caste, and he used ideas by that most potent method-interchange. Neither a missionary nor a student, he was happiest in the give-and-take of a private conversation. The world, he believed, is a globe of men

who are trying to reach one another and can best do so by the help of good will plus culture and intelligence—a creed ill suited to Chandrapore, but he had come out too late to lose it. (p. 60) (下線部筆者)

フィールディングはイギリス人が支配するチャンドラポアの町においても、善意・教養・知性によって個々の人間同士が理解しあえるという信条を持っている。インテリのアジズとの友情が芽生えるのも当然の成り行きである。初対面からふたりは打ち解け、アジズは自分のカラーボタンをフィールディングに与え、フィールディングは病気のアジズを見舞い、アジズは亡妻の写真をフィールディングに見せるようになるまでに、ふたりの人間関係は深まっていくのである。第一部の終わりには、「それでも二人は友達であり、兄弟であった。・・・めずらしく愛情が勝利をおさめて、二人はたがいに信頼するようになったのだ。」¹¹と異なる人種の二人の間に良好な人間関係が結ばれたことが宣言されている。

このように、フォスターの理想とする人間関係はあるグループ・社会に属する人間として結ばれるのではなく、個人と個人の間で結ばれるものと規定される。国などの組織に属さない個人対個人の間を優先するのである。作品が執筆された第一次世界大戦後の時期は、個人の利益は国家の利益に優先された混迷する時代であったが、こうした時期に個人の優位性を主張するフォスターは異色である。フォスターは『民主主義に万歳二唱』(Two Cheers for Democracy, 1951) のなかで個人的人間関係について次のように述べている。

Starting from them (= personal relationships), I get a little order into the contemporary chaos.... Personal relations are despised to-day. They are regarded as bourgeois luxuries, as products of a time of fair weather which is now past, and we are urged to get rid of them, and to dedicate ourselves to some movement or cause instead. I hate the idea of causes, and if I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country.¹² (括弧内は筆者)

フォスターは迷い続けるのが人間の証であると信じ、個人の存在理由がますます稀有になっていく時代に、「私は絶対的信条を信じない」と宣言し¹³、個人を優先し、国家への忠誠よりも個人的信条を重んじたのである。

第2章でのアジズと仲間たちとの議論、イギリス人との友情関係の維持は可能かについては、アジズとフィールディングの友情関係の破綻を検証してみよう。第一部で結ばれたふたりの友情関係は、第二部の「洞窟」にはいると、その真価を試される。マラバー洞窟は「何かが起こる」場所で、フォスターの小説の展開に重要な役割を果たす象徴的瞬間である eternal moment となり、アジズとフィールディングの表面的な友情関係はここで試練を受けなくてはならない。アデラは洞窟のこだまを聞き錯乱し、アジズを暴行未遂の罪で告訴し裁判となるのだが、フィールディングはアジズを擁護する。背景にはインド人の反英感情の増幅があるため、裁判はアジズとアデラの問題を超えて、インド人とイギリス人の、二つの民族の威信を賭けた対決になっていくが、洞窟での前後の事情を思い出したアデラが告訴を取り下げることによって、イギリス人側の敗訴となってしまふ。消極的ではあるがアジズを擁護したフィールディングはイギリス人たちからは裏切り者扱いにされ、イギリス人クラブを退会せざるをえなくなるのだが、裁判でアジズが無罪となり、インド人の側に立ってアジズを弁護したことによりアジズとの友情関係を一層深めたかに思われた。しかし、アジズが逮捕されて以来フィールディングはアジズの無罪を信じ、アデラに対しては告発を取り下げようと説得したにもかかわらず、裁判のあとアジズはフィールディングに対する不信感をつのらせていくのである。アジズはフィールディングとアデラ関係を誤解し、フィールディングがアデラに対する賠償金を諦めるようにと自分に説得したのはアデラと結婚するためだという疑念に取り付かれる。アジズの誤解を解くことが出来ないまま、友情に深い亀裂を生じさせてインドを去ったフィールディングがアジズと再会するのは2年後となる第三部においてであるが、友情を結ぼうとするお互いの努力にもかかわらず、完全な友情で結ばれることはなく、結局は別れる運命にある。『インドへの道』の最後の場面、マウ (Mau) のジャングルへアジズとフィールディングが馬で遠乗りに出かけ

た場面を見てみよう。フィールディングは同国人と結婚したことにより在印のイギリス人に運命を委ねる結果となり、今の自分には2年前のように、たったひとりの迷えるインド人のために同胞を敵に回す勇気などなくなったことを自覚している。そしてこれがアジズとの最後の午後になることも感知している。

...he rode against him furiously- “and then,” he concluded, half kissing him, “you and I shall be friends.”

“Why can’t we be friends now?” said the other, holding him affectionately. “It’s what I want. It’s what you want.”

But the horses didn’t want it—they swerved apart; the earth didn’t want it, sending up rocks through which riders must pass single file; the temples, the tank, the jail, the palace, the birds, the carrion, the Guest House, that came into view as they issued from the gap and saw Mau beneath: they didn’t want it, they said in their hundred voices, “No, not yet,” and the sky said, “No, not there.” (pp. 324-325) (下線部は筆者)

この場面では、アジズとフィールディングの友情関係の亀裂を大地までが望み、空までもが認めている。ふたりの努力にもかかわらず、ちょっとした言葉遣いや考え方の微妙なずれにより、完全な友情で結ばれることが出来ない。フィールディングがイギリス人女性ステラ (Stella) と結婚することは、社会的な枠組みに取り込まれ在印のイギリス人社会と運命を共にすることを意味しており、このような立場ではアジズとの人間関係の再構築には限界が生じることになる。こうした結末を考えると、作品の冒頭の、イギリス人とインド人の友情関係は構築できるのかという問いに対して、この結末は否定的な結論を下しているかのように解釈できる。フォスターの小説では一貫して人間関係が主題となっているのだが、最後の小説となるこの『インドへの道』に於いてフォスターは人間関係に絶望したことを意味しているのであろうか。アジズとフィールディングの別れは永遠の完全な別離を意味しているのであろうか。フォスターは、後年、別離こそが作家を満足させる結末であり、単

なる別離ではなく、別れる必要のある前に別れる人々、互いによく知りすぎたために別れる人々の別離で作品を終わらせるべきだと主張しているのだが¹⁴、『インドへの道』が出版された1924年には、「人間関係は、依然として私にはこの地上でもっとも真正なものに思われます。しかしその関係が発達し、持続さえする必要があるので、人は時々（精神的に）お互いから離れ、自分自身を向上させるべきだと考えるようになりました。『インドへの道』は、そのような別れを描いたものなのです。」¹⁵と述べている。そうすれば、この小説における別離は永遠の別れを意味しているのではなく、より深い人間関係を結ぶための契機であると解釈できるのではないだろうか。マラバー洞窟以降のムア夫人の沈黙を中心に更なる検証してみよう。

回教寺院の場面で、“I only know whether I like or dislike them.” (p. 21) とムア夫人が語っているように、キリスト教徒のムア夫人は論理よりも感性、直感に頼る人物であり、また、人生に対する諦観を抱いているところは¹⁶前作の『ハワーズ・エンド』のウィルコックス夫人 (Mrs. Wilcox) の後継者といえるが、異文化の宗教にも偏見を持たず、人生の神秘的要素に対する感受性、英知を備えている。インドに到着以来、ムア夫人は徐々にニヒリズムの兆候に侵食されつつあり、「丸天井のような大空の向こうには、また大空があり、いちばん遠いこだまの向こうには、沈黙の世界が広がっているような気がしてきた」(第5章)と述べるのだが、マラバー洞窟へ向かう列車の中で、人間関係や結婚について強い疑念を語っている。

She had brought Ronny and Adela together by their mutual wish, but really she could not advise them further. She felt increasingly (vision or nightmare?) that, though people are important, the relations between them are not, and that in particular too much fuss has been made over marriage; centuries of carnal embracement, yet man is no nearer to understanding man. And to-day she felt this with such force that it seemed itself a relationship, itself a person who was trying to take hold of her hand. (p. 135) (下線部は筆者)

「人間同士の理解はいっこうに深まっていない」と、ムア夫人は疑念という

よりはむしろ諦観を表明するのだが、この場面で語り手も全ての期待を棄てた諦観をさらに強調している。

India knows of their trouble....She calls “Come” through her hundred mouths, through objects ridiculous and august. But come to what? She has never defined. She is not a promise, only an appeal. (pp. 136-137)

このようなムア夫人の疑念が決定的になるのはマラバー洞窟の「こだま」を聞いた瞬間である。マラバー洞窟は eternal moment であり、知性を超える無限のものを象徴し、決定的な意味を持つ。「こだま」がムア夫人の人生観を根底から崩したと次のように語られる。

The more she thought over it, the more disagreeable and frightening it became....but the echo began in some indescribable way to undermine her hold on life. Coming at a moment when she chanced to be fatigued, it had managed to murmur, “Pathos, piety, courage—they exit, but are identical, and so is faith. Everything exists, nothing has value....But suddenly, at the edge of her mind, Religion appeared, poor little talkative Christianity, and she knew that all its divine words from “Let there be Light” to “It is finished” only amounted to “boun.”...She lost all interest, even in Aziz, and the affectionate and sincere words that she had spoken to him seemed no longer hers but the air’s. (pp. 149-151) (下線部は筆者)

全てのものを無に帰してしまう洞窟の「こだま」は圧倒的な力でムア夫人の人生への確信を打ち砕いたのである。「あらゆるものは存在するが、価値あるものは何もない」と「こだま」は呟いているようで、神の言葉も下劣な言葉も高尚な詩の言葉も全て「バウム」という響きにすぎないことを悟ったのである。あらゆる音が全て「バウム」というこだまと化してしまうマラバー洞窟でムア夫人が認識したこと、それは言葉による人間同士の理解は不可能であるということであった。マラバー洞窟での経験は、インドに到着以来ムア

夫人のなかで膨らんできた疑念に決定的な打撃を与えたのである。それはマラバー洞窟の「こだま」を聞いた後のアデラとの会話にも窺えるのだが¹⁷、あらゆる論理や言葉に対する不信感、また絶望であり、ムア夫人に残された手段は沈黙のほかにはないのだ。ムア夫人がマラバー洞窟でみたものはまさに nightmare であった。それ以降のムア夫人はあらゆることに興味を失い、アジズの裁判に際して自分の証言が重要だとわかっていながら、傍観者の立場を採り、全てを放棄して沈黙を守る。沈黙に関しては作品中に随所で言及されているが、例えば、ブリッジ・パーティの場面（第5章）、ゴドボール教授の歌の後の沈黙（第7章）、洞窟の沈黙の闇（第12章）、法廷での裸の男の沈黙（第24章）などに言及されている。前作の『ハワーズ・エンド』における多様性の容認のあと14年を経て、またその間に第一次大戦を経験し、フォスターの最後の小説においてムア夫人は沈黙し、全てから退却する。『インドへの道』以前の作品においてもフォスターは混乱と無秩序の場面を描いているが、マラバー洞窟の沈黙、無秩序は、全てを否定するものであり、宇宙の沈黙に対して人間が無力な存在であるという圧倒的な絶望感を表している。

第14章の冒頭でフォスターは芸術の存在理由について述べているが、そこで沈黙についても語り、「沈黙」こそが人生の理想で、沈黙していられればそれにこしたことはなく、芸術もなくてすむというのだが¹⁸、ムア夫人の沈黙はこれと同様のものではない。しかしながら、全ての期待を棄てたムア夫人の幻滅、諦観がフォスターの最終的な解答であるともいえない。ムア夫人は第二部の23章で姿を消してしまい、その後の裁判などの重要な場面では登場人物たちのなかに vision としてしか登場しない。姿は現さないがその後の作品を支配する。イギリスに帰る船上で既に亡くなっているにもかかわらず、アジズを裁く法廷ではヒンズー教の女神に祀り上げられてエスマス・エスマア (Esmiss Esmoor) と法廷の内外の群集に旋風のようにその名を大合唱され、その「こだま」はアデラにアジズの無罪を証言するように促すのである。'While thinking of Mrs. Moore she heard sounds, which gradually grew more distinct' (p. 219) と、ムア夫人のことを考えていると、アデラには「こだま」らしき音が聞こえてくる。錯乱したアデラを正気に戻し、真実に目を向けさせるのはムア夫人の影響であるといえる。さらに、アジズがアデラに対して

賠償金を請求しないことに決めるのは、それがムア夫人の希望にかなうと考えたからである。‘the name that is very sacred in my mind’ (p. 314) と、イギリス人を憎むアジズの心のなかにムア夫人はいつも存在するのである。第三部においては、ゴドボール教授の心の中にムア夫人は甦るし、彼女の資質は彼女の子供たちに受け継がれるのである。ムア夫人は感覚的な存在として人々の心のなかに生き続け、人々の和解を可能にするのである。ムア夫人がマラバー洞窟のこだまを聞いて認識したものはnightmareであったのだが、言葉を介さないムア夫人の沈黙という「こだま」はvisionとなって、アジズ、アデラ、フィールディングなど多くの人物の感覚のなかに響き渡っていき、緊張関係を緩和させる要因となっているのである。フィールディングとムア夫人はイギリス人とインド人のふたつの民族の橋渡しの役割を果たす人物であるが、インド人に対して好意を抱いているにもかかわらずフィールディングはアジズと離別しなくてはならないのに対して、ムア夫人はマラバー洞窟以降の沈黙、非行動性にもかかわらず最後まで影響力を持ち続けていることは象徴的である。

トリリングも指摘するように¹⁹、『インドへの道』は不完全さ、曖昧さを含んだ小説であり、フォスターの多くの小説でそうであるように、フォスターは問題を提示するだけで明解な答は提示していない。最後の場面のアジズとフィールディングの別離は、言葉を使用する関係は、相互理解に限界があることを示しており、ムア夫人も同様の見解を示している。それならば、人と人を結びつけるものは何かという問いに対するフォスターの見解は、ムア夫人の沈黙に答えを見いだすことができる。人間関係を構築するためにフォスターは社会、国家、政治に期待をしておらず、個人個人の、人を超越のものに対する感覚に訴えかけるものを認識すること、それが相互理解の方法であることを暗示している。最後の別離の場面の‘No, not yet’ と ‘No, not there’ は否定的な表現であるが、マイク・エドワーズ (Mike Edwards) も指摘するように²⁰、未来に対するポジティブな可能性、not yet, but perhaps in another time; not there, but perhaps in another place という希望が含まれており、フォスターは絶望感で作品を終えているのではなく、未来への希望を託しているのである。人々の人間関係は今よりも将来は好転するであろうという期待を、

控えめではあるが宣言してフォスターは作品を終えているのだが、しかしその後第二次大戦が勃発し、そして現代に至って未だフォスターの期待する世界は訪れていない。

Notes

1. この間にフォスターは長編小説は一編も発表していないが、全く執筆活動がなかった訳ではなく、数編の短編小説と死後出版となった『モーリス』、アレキサンドリアの歴史案内の執筆はあった。

2. 『アビンジャー・ハーヴェスト』のなかの「私の森」というエッセイで、この間の状況を次のように述べている。

A few years ago I wrote a book which dealt in part with the difficulties of the English in India. Feeling that they would have had no difficulties in India themselves, the Americans read the book freely. The more they read it the better it made them feel, and a cheque to the author was the result. I bought a wood with the cheque.

E. M. Forster, *Abinger Harvest* (London: Edward Arnold & Co., 1936), p. 23.

3. 1919年にダイヤー将軍によるアムリッツアの虐殺があり、作品が発表された1924年にはまだその記憶が生々しく、在印イギリス人のインド人に対する差別的感情が注目された。

4. But despite this care for detail, one must beware of thinking that Forster is some kind of impressionist. The danger that menaces a writer like Virginia Woolf (but the miracle is that she knows how to triumph over it) is that of not being able to separate an individualized human being from the sensations which, so to speak, stifle it.

(Translated from Jacques Heurgon, 'Les Romans de E. M. Forster', *Revue de Paris* cxvix, April 1927, 701-9.)

David DowlingはVirginia Woolfの言葉を引用して以下のように批判している。

Forster's last and greatest novel has continually teased critics into endless debate about its completeness as a work of art. Virginia Woolf was clearly unimpressed by the 'wholeness' of it when, after praising its observations and social satire, she rather archly commented, 'Mr Forster has almost achieved the great feat of animating this dense, compact body of observation with a spiritual light.' 'Clear and triumphant beauty', she said, existed only in chapters.

(David Dowling, *Bloomsbury aesthetics and the novels of Forster and Woolf*, The Macmillan Press Ltd., 1985, p. 71.)

5. 称賛する批評に以下のものがある。

Reader, lo here, at last, a great book. There have been brilliant books in recent years, witty books, original books, books written in limpid and exquisite English; but not until now has there been a book that was all these things, and at the same time a book of large plan and sustained achievement, a book of new knowledge as well as of wisdom and

imagination, a book that illumines a social and political problem and leaves it so revealed that the old revelations of it fade into trumpery insignificance. All this and more may be said of *A Passage to India*.

(Sylvia Lynd, 'A great novel at last', *Time and Tide*, v, no.25, 20 June 1924, 592-3.)

It was only to be expected that Mr. E.M.Forster's novel when it did come, after a silence of fourteen years, would be a remarkable one. What might further have been expected was that it would in itself contain an explanation of that abnormal interlude. *A Passage to India* does this: it tells us that the miracle is not that Mr. Forster should have taken fourteen years to write it, but that he should have written it at all.

(John Middleton Murry, 'Bo-oum or Ou-boum?' *Adelphi*, ii, no. 2, July 1924, 150-3.)

Mr. Forster's book has been widely praised as one of the great novels of the year, and even the reader who quarrels with his views will admit it to be a work of outstanding ability.

('A striking novel', *Stateman*, 15 August 1924, 6.)

A Passage to India seems to be the most significant of the many Anglo-Indian novels which have come to us in recent years. It goes deeper into the problems of Anglo-India, while at the same time it offers us as clear and as accurate a picture of the conditions under which English and Indians live as any we have read.

('D.L.M.', review, *Boston Evening Transcript*, 3 September 1924, 6.)

A Passage to India is no *War and Peace*: its range is narrower, its world less populous; yet from it too one may say that great chords reverberate. Its suggestive power is immense. It is unquestionably one of the great English novels, and the one novel of Forster's that fully justifies his reputation as a major twentieth-century novelist.

(John Sayre Martin, *E. M. Forster: The endless journey*, Cambridge University Press, 1977, p. 143.)

6. "Peter Burra's Introduction to the Everyman Edition," in *A Passage to India*, p. 322.
 フォスター自身も『インドへの道』のエヴリマン版の序文で、この小説を書くにあたって主たる目的としたものは政治的、社会学的ものではなくて、ピーター・バラがこの本に付け加えた序文に述べられたものだと語っている。("Forster's Prefatory Note (1957) to the Everyman Edition," in *A Passage to India*, p. 313.)
7. Arthur Martland, "E. M. Forster: Passion and Prose" (1999), p. 195.
8. "Author's Notes and Other General Notes," in *A Passage to India*, p. 346.
9. コーマーはこの三部構成を弁証法的に解釈し、トムソンは個人の精神史の三段階と捉えている。

John Colmer, *E. M. Forster: The Personal Voice* (London: Routledge & Kegan Paul, 1975), p. 160.

George H. Thomson, *The Fiction of E. M. Forster* (Detroit: Wayne State Univ. Press, 1967), p. 201.

10. E. M. Forster, *A Passage to India* (London: Edward Arnold & Co., 1924), p. 21.
以下、引用文の後の頁数はこの版のものを示す。
11. 小野寺 健 訳、『インドへの道』（みすず書房、1995年）161頁
12. E. M. Forster, *Two Cheers for Democracy* (London: Edward Arnold & Co., 1951), p. 78.
13. 小野寺 健 共訳、『民主主義に万歳二唱 I』（みすず書房、1994年）103頁
14. E. M. Forster, “Pessimism in Literature,” in *Albergo Empedocle and Other Writings*, ed. George H. Thomson (New York: Liveright, 1971), p. 137.
15. Mary Lago & P. N. Furbank eds., *Selected Letters of E. M. Forster* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1985), Vol. II, p. 63.
16. ムア夫人は昔から諦観に傾きがちであったと、述べられている。
Mrs. Moore had always inclined to resignation. (*A Passage to India*, p. 219.)
17. ムア夫人はアデラに言葉による理解の限界についてつぎのように語っている。
“Say, say, say,” said the old lady bitterly. “As if anything can be said! I have spent my life in saying or in listening to sayings; I have listened too much. It is time I was left in peace... The human race would have become a single person centuries ago if marriage was any use. And all this rubbish about love, love in a church, love in a cave, as if there is the least difference, and I held up from my business over such trifles!” (*A Passage to India*, pp.201-202)
18. これはフォスターの逆説であって、実際には何の波乱もない人生などありえないので、芸術の存在価値があるのだが、以下のように述べている。
Most of life is so dull that there is nothing to be said about it, and the books and talk that would describe it as interesting are obliged to exaggerate, in the hope of justifying their own existence. Inside its cocoon of work or social obligation, the human spirit slumbers for the most part, registering the distinction between pleasure and pain, but not nearly as alert as we pretend. There are periods in the most thrilling day during which nothing happens, and though we continue to exclaim, “I do enjoy myself,” or, “I am horrified,” we are insincere. “As far as I feel anything, it is enjoyment, horror”—it’s no more than that really, and a perfectly adjusted organism would be silent. (*A Passage to India*, p. 133)
19. Lionel Trilling, *E. M. Forster* (Revised Edition; London: The Hogarth Press, 1967), p. 138.
20. Mike Edwards, *E. M. Forster: The Novels* (Palgrave, 2002), p. 171.